

序論

第一節 研究の目的

本研究の主題は、神話学と文学の関係について論じることである。

神話と文学との間には、常に密接な繋がりがあった。太古の神話はそもそも文学作品として今日まで伝わっている。近・現代の作家はしばしば、古い神話を取り上げてはそこに新しい内容を吹き込むことによって創作を行なう。「神話と文学」という主題を掲げるとするなら、「神話とは何か」、「文学とは何か」という根本的な問題を追求する事が求められることになるだろう。「神話と文学」とは、それ程大きな問題である。

しかし、本研究が主題に掲げるのはあくまで「神話学と文学」である。神話と文学との繋がりのなかで、近代以降の神話学は大きな役割を果たしてきた。これまで、そのことに対して重大な注意が払われたことは、意外にも多くないと思われる。そこに注目しようとするのが本研究である。本研究では特にドイツにおける神話学が、ドイツ語圏の文学作品に与えた影響について注目する。

ルネサンス以来、西洋の教養において、古典古代についての知識が大きな位置を占めていることは改めて論じるまでもない。そこには、古典語の知識に加え、古典古代の神話についての知識も含まれる。作家は概して知識階級に属し、神話についての知識を基本的教養として持っている。西洋の教養における古典古代の知識の重要性はあまりに自明である。そのためにかえって、近代以降の神話学の成果が作家の神話理解を助け文学作品に影響を与えていることが見逃されてきた、と筆者は考えている。神話を創作に取り入れた作家が、近代以降の神話学を下敷きにした例は多く見出される。神話学がそうして文学作品の神話的モチーフのための資料となった例については、本論で論じたい。

神話学と文学の関係を考察することによって、これまであまり顧みられなかった問題に光を当てることができる。それは、文学作品における神話的なものの表象が、ある種の先入見によって支えられているという問題である。その問題は、神話と文学の関係を神話学からの影響という観点から捉えようとする本研究の動機となったといっている。

神話学の中には、西洋の知的世界が有していた異文化への先入見が色濃く現れている。神話学は 18 世紀末ころから盛んに行なわれるようになった学問である。そのことは、神

話学の興隆の契機の一つとなったのが西洋の植民地主義の始まりであったということと関係する。神話学に内在する先入見の問題は、近代西洋の時代性と深く繋がる問題である。

18世紀末以降、西洋諸国はインドをはじめとするオリエント世界へ進出した。そのことは、あるいは古代インド・ペルシアの『ヴェーダ』、『アヴェスター』といった文献が広く西洋の知識人の目に触れ、あるいはメソポタミアの楔形文字が解読され神話が知られる契機となった。オリエントの神話が西洋の知的世界の目に触れたことによって、キリスト教やギリシア・ローマの古典古代文化理解にも新たな可能性が開かれた。

その植民地主義・帝国主義をリードしたのは主にイギリスとフランスであった。神話学もまたその両国においてまず発展を見せた。オリエントからの様々な資料がイギリスとフランスにもたらされたためである。ドイツは植民地主義・帝国主義において遅れをとった。ドイツの神話学は、イギリス・フランスを経由して受け取った資料や学問的成果を土台に成立した面があるが、概して思弁的・観念的傾向が強く、それだけに神話を解釈する論点に英仏以上に西洋中心主義的先入見がみられる。

諸々の研究者達の指摘によって、20世紀前半までの神話研究が今日においてはもはや承認され得ない様々な先入見を含むものであったことが確認されている。その先入見を形成している大きな要素の一つとして、ヘーゲル哲学とダーウィニズムが結びついたところに生まれた進歩史観が挙げられる。20世紀前半くらいまでの神話学を見ると、神話は未成熟・未発達 of 文化の産物であり近代西洋の水準からみて原始的な文化である、という理解が研究の前提となっている例は多かった。合理的なものとは非合理的なもの、精神的なものとは物質的なもの、男性的原理と女性的原理、といった様々な二項対立の図式がその進歩史観のなかにあてはめられた。より優れた前項の特徴を持つ西洋の文化と、その段階に達しない後項の特徴を持つ非西洋の文化という観念が、18世紀末から20世紀前半までの神話学の中で大きな力を持っていた。その観念は、植民地主義・帝国主義の時代にあつて、西洋の非西洋世界への進出を正当化する理論ともなっていた。

文学作品に与えた神話学の影響を考察する本研究の主題にとって、神話学に内在するこうした自文化中心主義的思考に検討を加えることは非常に重要な作業となる。したがって、論文の構成と内容に照らしても、18世紀末以降の神話研究に検討を加えるための章が大きな割合を占めることになる。以降、論文構成を提示しながら本研究の論旨をさらに詳細に述べていくことにする。

第二節 論文構成

本論文は、この序論の他に、五つの章と結論を合わせた構成になる。

第一章『近代ヨーロッパの神話学』は、神話学に内在する時代性についての先行研究を概観した章である。この章では、近代における西洋の神話学に内在していた自文化中心主義的思考について、植民地主義・帝国主義という時代性を視野に入れつつ、一般的観点から考察する。一般的というのは、第二章以降で採り上げることになるのがドイツ語圏の神話研究や文学作品であるのに対し、ドイツ語圏をも含めたヨーロッパの知的世界一般についてできるだけ大きな視野から考察するという意味である。というのは、西洋の異文化に対する先入見を植民地主義・帝国主義という時代背景のなかにおいて考える場合、西洋の外への進出において先んじていたイギリスとフランスの状況も考えなければならないからである。文献資料の獲得や、古代の文字の解読などといった面についてまず西洋の知的世界をリードしたのは、イギリスとフランスの二国であった。植民地主義や帝国主義の面で遅れをとっていたドイツにあっては、その二国を介して受け取る資料や情報が研究の重要な基盤になった。とりわけ、インド支配や南太平洋地域への進出でより先んじていたイギリスからは、20世紀前半までの神話研究の流れを基礎づけるような重要な著作が生まれている。

この第一章では、19世紀以降20世紀前半までの神話研究の特徴をなし、特に異文化に対する先入見的判断を形成している要素として、進歩史観ならびに主体－客体をはじめとする二元論が挙げられることになる。

これ以降、第二章と第三章ではドイツの神話学について、第四章と第五章では文学作品について論じる。

第二章『ロマン主義の神話学』では、18世紀末から19世紀前半におけるドイツロマン派の神話学を採り上げる。ドイツロマン派の神話学の特徴として重要なことは、やや先立つ時代のフランス啓蒙主義における合理主義に対抗した神話観を展開したことである。

「神話は文化的に未熟な古代人の荒唐無稽な空想である」と位置付けた啓蒙主義に否を示

したロマン主義は、神話に根源性を認めた。啓蒙主義の合理主義的神話観は 19 世紀後半以降の、進歩史観に基づく先入見へ繋がるものであるが、一方ロマン主義の神話観もまた、オリエントの古代を称揚する一方で、限られた資料とキリスト教中心の思考により、神話に対する自文化中心主義的先入見を形成している。

第三章『進歩史観と二元論に基づく神話解釈』では、19 世紀後半以降の神話研究を採り上げる。中心となるのはエルンスト・カッシーラーの神話研究である。そこではイギリスから発した比較神話学や人類学の成果が取り入れつつ、精神と物質の二元論と進歩史観による神話分析が行なわれている。またそこに色濃く反映しているのは、近代西洋を歴史の頂点におくヘーゲルの歴史哲学の影響である。精神は自然と距離をとり自立していくことによって発展していくというヘーゲル流の精神の現象学も土台になっている。古代の神話的世界観から近代的認識までを、精神の成長・認識能力の成熟の過程と捉えるカッシーラーの神話論は、20 世紀前半までの西洋の神話観を総括しているといってもいい。

第四章と第五章は、神話研究と密接な関わりを持つ文学作品を採り上げる。

第四章『二元的世界観の否定 —ニーチェの〈ツァラトストラ〉』では、フリードリヒ・ニーチェの『ツァラトストラ』を扱う。1844 年生まれのニーチェは、神話についてロマン主義の研究を土台とした知識を有していた。『ツァラトストラ』は様々な象徴的・比喩的表現に満ちた作品だが、そうした表現の多くが神話から採られている。そのニーチェが神話を知る知識源としたのがロマン派の神話学だった。

『ツァラトストラ』で重要なことは、天と地、昼と夜、太陽と月、鷲と蛇など神話世界において様々な二元性をつかさどる象徴が盛り込まれている点である。ニーチェはそうした二元性を否定する文脈の中であえてそうした象徴を用いる。ニーチェはそれを以て、精神と物質、主体と客体といった二元論的思考を否定し、循環する円環を描くような世界観をつくらうとする。本研究においてニーチェには、進歩史観と二元論という西洋的世界観・価値観に対する批判者という位置づけがなされる。

第五章『母権制とオリエント・アジア的なものの表象 —ホーフマンスタールとヘッセの場合』では、ヘルマン・ヘッセの『デーミアン』とフーゴ・フォン・ホーフマンスタールの『第 672 夜のメルヘン』を採り上げる。この二つの作品を見た場合興味深いのは、作中の女性像がもつ神話的イメージの共通性である。どちらも、ロマン派の神話学者バハオーフェンの『母権制』からヒントを得て、地母神的・冥府的な雰囲気帯びた女性像を描き出して

いるのである。そこには、合理的・男性原理的西洋世界と、非合理的・女性原理的な非西洋世界という、神話学が有していた先入見が形作った表象が影響している。

最後に、『非合理の発見とヨーロッパ精神の動揺』と題する結論の章で、本研究の成果を総括し、導き出された問題性を提示する。重要なのは、非西洋世界が常に西洋に対する他者イメージを提供し続けていたということである。その他者イメージとは、一方では根源的なものにより近い、神秘的で豊饒な世界でもあり、他方では西洋のような理性的認識をもたない未成熟の精神の世界、という表象であった。

ヨーロッパ世界は近代において合理的思考を發展させてきたが、それは常に、他者である非合理的なものの発見とそれとの対決という裏面をともなっている。西洋の知的世界は異質なものと接触・衝突を繰り返しながら、自己の同一性・正当性の主張を作りあげてきた。そのような自己の主張の中には或る面で先入見的な、他者に対する誤解も含まれている。それが観念的な領域に留まる問題ではなく、むしろ歴史、文化、地域・人種観など様々な面での異文化との接触から発した現実的な問題であることを、本研究は神話学の変遷をみながら明らかにする。

第三節 神話学の定義

本研究において問題とする「神話学」という学問領域の性質について、この序論の中で節を設けて述べておくことにする。

学問領域としての「神話学」は、実はその範疇についての定義が明確ではない。吉田敦彦が、神話学は「アカデミックなディシプリンとしてはまだ位置を得ていない」¹領域であると述べている通り、文学や哲学、歴史学などの人文諸科学とは異なり大学の学部名として「神話学」と冠されることはない。またより個別的な分野であり研究対象が神話学と重複すると思われる文化人類学や宗教学といった学問とも異なり、学科として成り立っているという状況にもない。松村一男は、「神話学という確立した領域があるわけではない」ので、神話研究のながれを概観するには「言語学、西洋古典学、心理学、人類学、宗教学など、関連する学問領域」に目を配ることが必要になる、と述べている。²既に20世紀初頭のドイツにおける比較神話学派の学者が、先の吉田と同じようなことを述べていた（それについては後に触れる）。その状況が今日も変わっていないのである。

しかし、この神話学の不確定な在り方そのものが、本論の主題を提起することになる。

エリアーデは、19世紀以降の神話研究の流れを概説することの困難さには二つの理由があると述べている。一つは、神話を見る姿勢があまりにも多様であるということであり、もう一つは、西洋の研究者が神話に対して抱いていた「寓話」、「作り話」といった先入見が20世紀前半を過ぎて通用しなくなってしまったことである。³

神話学という領域の不確定さは、神話学が学問として未熟だというよりも、神話という対象そのものから生じる問題と考えなければならない。世界中の神話はあまりにも多様であり、それゆえ論じる姿勢も様々なものになる。さらに、先のエリアーデの指摘を考えれば、従来の先入見的な神話観が通用しなくなり、神話の見方やその研究方法は一層多様化し、一つの学問領域としての境界が不確定になったといえる。

本論では18世紀末以降の神話学について考察するが（神話学の始点をどこに置くかということ自体も論点になるが）、本論文の題目にも掲げたとおり、神話学は変遷してきた。次節以降で詳述するが、神話学は拡がってゆく対象や多様化する研究方法などに従って揺

れ動いてきた。

本節では、確固たる境界線を確定しがたい神話学の在り方をみることによって、本論の主たる問題である神話の研究と時代の流れとの密接な関連を明らかにしておきたい。

1. Mythologie の定義

一つの範疇としては境界を画定しがたいとはいえ、「神話学」という言葉は存在する。

「神話学」という日本語はドイツ語の *Mythologie* や英語の *mythology* の訳語であるが、これは単に「神話」とも訳される言葉である。フリードリヒ・マックス・ミュラー(*Friedrich Max Müller* 1823-1900)の著書 „*Comparative Mythology*” (1856)⁴は、一般に近代的な神話学の出発点にあると位置付けられるものである。*comparative* とあるところからもわかるように、ギリシア・ローマの古典古代の神話とペルシア・インドなどのオリエントの神話を比較研究するのがマックス・ミュラーの基本姿勢である。この場合の *mythology* は、諸神話についての比較検討的研究ということで、「神話学」と訳すべきであろう。後の章で取り上げることになるゲオルク・フリードリヒ・クロイツァー(*Georg Friedrich Creuzer* 1771-1858)の著書に „*Symbolik und Mythologie der alten Völker, besonders der Griechen* (『古代諸民族、特にギリシア人の象徴と神話』”(1810-1812)⁵がある。この場合、「古代諸民族の (*der alten Völker*)」とあるところから鑑みて、*Mythologie* は「神話」とするのが妥当だろう。

Mythologie という語そのものについて厳密に言えば、これは *Mythos* と *Logos* という言葉からできている語である。それはミュトスに関するロゴス言説ということであり、すなわち「神話を研究する学問」のことになる。エリアーデが言うようにここには、神話 *mythos* がロゴス *logos* と異なった、非現実の意味を持つという見方が既にある。⁶ともかく、神話についての古典的なテキスト、たとえばヘシオドスの『神統記』が既に、それ以前の神話を体系付けて記したものでありミュトスに関するロゴス言説ということができる。⁷神話がすなわち神話に関する研究なのであり、既にヘシオドスが最初のミュトロゴスだとも言える。神話学 (*Mythologie*) という語が神話学と神話を同時に意味する所以である。先に神話学の始点をどこに置くかという問題がある、と述べた。それは単に、どの学者の研究が神話学の始点にあるか、という問題だけでなく、*Mythologie* (*mythology*) といった場

合の語の定義に関する問題のことでもある。

本論では、ヘシオドスにまで遡って神話に関する言説を検討することはできない。本論で対象にするのは 18 世紀末のドイツロマン派以降の神話学である。先にマックス・ミュラーを近代的な神話学の出発点にあるとしたが、彼の研究は 19 世紀半ばのものである。マックス・ミュラーを始点とするのは、今世紀のデュメジルにまで繋がっている比較神話学を見る場合である。本章の次節で詳しく述べるが、マックス・ミュラー及び彼の比較神話学の契機になったのは、インドからイギリスへもたらされた神話の様々な資料の存在である（ドイツ出身のマックス・ミュラーはイギリスへ留学している）。そうした資料がイギリスへもたらされたのは、七年戦争(1756-1763)の際にインドでイギリスとフランスが戦争し、イギリスの戦勝によってインドがイギリスの植民地になったという背景がある。18 世紀末には既にオリエントの神話の写本などがイギリスへもたらされているのである。そのような時代背景については本章中で後に触れるが、18 世紀末～19 世紀始めのドイツロマン派の神話学はオリエントからの新しい資料の受け取り手として大きな存在なのであり、先のクロイツァーもそこに属する神話学者である。

2. 神話の見方の変化 —— 文献学の変化

吉田教彦は、神話についての考え方がこの半世紀足らずの間に、「天動説が地動説になったのと同じくらい」大きく変化した、と言っている。つまり、現在では、二十世紀前半くらいまでの神話観は根本的なところでは通用しないものとなっているというのである。その変化以前の神話研究を特徴づけていたのは、「原初の痴愚」という神話観と、学問としての古典文献学である。⁸松村一男も同様の観点から神話学のパラダイム・シフトを指摘しており、神話学を 19 世紀型と 20 世紀型に分けている。1920 年代ほどまで続いた 19 世紀型の神話学を支えていたのは進化論と歴史主義であった。

神話を原初の痴愚とし、近代世界へ進化する歴史的段階の最初に属するものとするのが変化する以前の神話学であった。「神話」とは、人類が現在のような知的に発展したレベルに達する以前の、未開で野蛮で思考も幼稚であった原始時代の文化の産物であると考えられた。神話とは極言すればたわごとであり、荒唐無稽な内容、支離滅裂な筋で意味も論理も欠いており、未開野蛮な文化段階を反映しているもとだというのである。その図式は同

時代の「未開人」と呼ばれるような人々の持つ宗教や文化を研究にもあてはめられた。すなわち未開人の文化を理解すれば近代人の「人類の宗教」、「人類の文化」の最も原初的でオリジナルな在り方も理解することができるという考え方である。文化人類学の出発点にあるタイラー(Edward Burnett Tylor 1832-1917)やフレイザー(James George Frazer 1854-1941)らの、イギリスの人類学における神話の研究は基本的にはそのような観念の下になされていた(タイラーの研究の性格については後に詳述する)。前述のマックス・ミュラーの比較神話学も同様の観念に基づいていると言えるものである。

そうした考え方の土台をなすものの一つとして、古典文献学という学問の性質が挙げられる。神話の研究は、18世紀末のロマン派の時代から既に古典文献学(Philologie)の領域にあった。ギリシア・ローマの古典古代から伝わる古いテキストを精緻に読み込み、断片的なものの復元を目指したり、典拠を確定したりするのが古典文献学のそもそもの仕事である。研究の対象があくまでも文献である。上に名を挙げた研究者たちの仕事も根本のところでは古典文献学であった。フレイザーなどは人類学者であると同時に古典に関する大家であり、彼にとって学問とは古典学者がギリシア語・ラテン語の文献を読み、注釈を付したり体系的な理論にまとめるというような、古典文献学の分野で伝統的にとられてきた方法以外には考えられなかった。フレイザーには、オーストラリアの現地に行き原住民に触れてみてはどうか、という勧めに対し「何のために？」とこともなげに言い返した、というエピソードもある。現地で未開人に触れるのは行政官や商人、宣教師といった植民地運営の担い手たちの仕事であり(南太平洋のポリネシアやメラネシアの宗教について著書を書いた宣教師コドリントン(Robert Henry Codrington 1830-1922) などはその例に当たるが、それについては後に詳述する)、そのような人々が書き記し本国へ送る報告書や研究の類を資料にして分析するのが学者の仕事だったのである。⁹

しかしそこに当時の研究の問題点があった。いわゆる未開文化に関する資料を書き記しもたらした人々—行政官であれ宣教師であれ、そもそもヨーロッパから現地へゆき原住民と接している人々—は、未開人は自分たちよりあらゆる点で遅れている人々であり彼らの宗教も迷信であり、彼らをキリスト教に改宗させヨーロッパの植民地行政によって文化の恩恵を与えるのが自分たちの使命である、といった立場にいた。¹⁰ 第一歩から既に、自分たちと違う未開で野蛮な文化、という先入見があったのである。松村は19世紀の進化論パラダイムが「西洋列強の帝国主義・植民地主義の御用学問として利用された」¹¹と述べている。

二度の大戦を経て、西欧諸国の植民地主義・帝国主義が過去のものとなった現在において、異文化へのこのような視点が通用しないものになっていることは自明である。20世紀の神話研究を見る場合の大きな存在であり『構造人類学』(„Anthropologie structurale”, 1958)などの研究があるレヴィ=ストロース(Claude Lévi-Strauss 1908-)は文献学を脱したフィールドワークの方法を採った。松村は20世紀型の神話学を支えているのは構造主義と反歴史主義だと述べている。その構造主義の代表者レヴィ=ストロースは、神話の研究はこれまでほとんど全部が試行錯誤の繰り返しであり、或る世代でなされた研究を次に出てきた学者があれば全部間違いだったと行ってご破算にしてまた一から始めるということを繰り返してきた、と言う。¹²これは、神話学というものを一つの範疇として括りにくい様子を端的に表現している。

3. 様々な解釈方法

上記のように、神話についての伝統的な見方が通用しなくなると、無論それに変わる新しい観点が必要になる。西洋の文化を基準として異文化を測るということの問題が明らかになれば、それに変わって現れてくるのは、或る文化をそれ自身の内にある性質を明らかにすることによって分析するという観点である。神話にもそのような観点が必要となってきたのである。神話は、それが産み出された民族や地域に独自の文化基準に照らして研究されなければならない。大林太良(1929-)は自著『神話学入門』(1966)を「民族学だ」と述べている。¹³神話を研究するためには、政治や宗教の形態、産業、衣食住、家族形態など、神話を持つ社会の特徴をなすあらゆるものから、できる限り先入見のないかたちでの手がかりを得なければならなくなってきた。その意味では、神話学は考古学とも切り離すことができない。テキストとして遺っているものの研究だけでは神話の分析は充分ではなく、たとえば古代の宗教の在り方が神話の解釈に非常な重要な要素となってくることもまた自明のことである。例えばマックス・ミュラーには、先に挙げた比較神話学の研究だけでなく、宗教学の土台をつくった„Introduction to the science of religion (『宗教学入門』)”(1873)という著作もある。宗教学の方は学問として成立しているが神話学はそうではない。神話の研究は、神話の理解に必要な様々な視点に従って細分化したと言えるかもしれない。

ハンガリー出身の神話学者カール・ケレーニイ(Karl Kerényi 1897-1973)は、古典文献学者であるが、古代ギリシアにおけるディオニューソス崇拝の研究に関して、クレタ島での発掘の成果を踏まえた著作のある人物である。神話の研究が考古学とも密接に結びついているものであることは、ケレーニイの „ Dionysos. Urbild des unzerstörbaren Lebens. (『ディオニューソス 破壊されざる生の根源像』”(1976)などをみるとわかる。ケレーニイは1939年の論文 „ Was ist Mythologie ?”で、神話や宗教の研究が多くの観点から総合的に行なわれなければならないものであることを述べている。

古代の宗教が本質的にどのようなものであったか、ということの研究するのは、古代の文化の正確な像へと至るための多くの道の一つに過ぎない。それに、この一つの道を行くにしても、様々な出発点から同じ目標へとたどり着くこともできる。それどころか、宗教や神話の研究には、ある時はこの、そしてある時はまた別の観点を探る、ということが欠かせないのである。それは、或る一つの観点を探ることによって得られた視野を、別のところから見た別の視野によって補完するためなのである。¹⁴

そのケレーニイが編集した神話論集に „ Eröffnung des Zugangs zum Mythos (『神話への道を開く』”(1967)¹⁵がある。この論集は18世紀から20世紀にいたるまでの西洋の神話研究を抄録したものである。神話の研究の多様さは、このような論集に収められている著作の著者の名をみても推し量ることができる。主にクロイツァーなどドイツ語圏の文献学者の研究が多く収められているが、その他に先のマックス・ミュラー、哲学者ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770-1831)やシェリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling 1775-1854)、さらには精神分析医ユング(Carl Gustav Jung 1875-1961)、人類学者マリノフスキー(Bronislaw Malinowski 1884-1942)の名をそこに見出すことができる。ここには、編者であるケレーニイの言う多様な観点の必要性そのものが現れていると言ってもよい。多様な観点・論点があるということは神話の研究にとまなう困難さであり神話学というものの定義を難しくする要因であるが、しかしそれ自体が神話のもつ性格をあらわすことにもなる。ケレーニイはこの抄録に付した序論を次のように結んでいる。

時流に合った解釈(hermeneia)、すなわちその時々々の解釈法の必要を満たしかつ時代の制約を基準とすることを免れないような真理への要求を満足させるものを言葉で

説明するということは、常に存在する事態である。そのような解釈(hermeneia)、つまり説明的な研究が源テキストの(des Urtextes)代わりの位置を占め、あるいは現象学的や歴史的方法による学問や言語芸術の成果が源現象の(des Urphänomens)代わりの位置を占める、という意味での解釈に終わりが来る、ということは考えられないのである。¹⁶

神話に限らず、文学にしる、哲学にしる、解釈というものがその時代時代の思潮に制約されているというのは人文科学一般の問題とは言えるが、千年の単位の時間的距離がある神話という対象についてはその解釈の問題がより一層大きなものとなるといえよう。それだけでなく、時代の経過とともに新たな資料が発見されるということが神話の研究に大きな変化をもたらす。

神話学に起こった変化とは、先に吉田を引用して述べた変化だけのことではない。植民地主義・帝国主義は 19 世紀半ば以降の研究に関してのみ問題となるのではなく、西洋が経験してきた異文化との接触を特徴づける重要な要素である。本論はその異文化との接触という西洋の経験を 18 世紀末以降の神話学にみる。つまり神話学の変遷についての本論の重点は、20 世紀前半までの神話学にみられる西洋中心主義を現在の観点から見て否定することには全くない。批判的観点は必要であるが、重要なのはその時代ごとの神話の見方を特徴づけているのが近代西洋の思想のどのような性格であるのか、ということをも明らかにすることである。

神話学と文学作品の関係という本論のさらなる主題を追求するには、西洋が神話を時代ごとにどのように捉えてきたかをそのように批判的に考察する必要がある。それは、文学作品に神話的モチーフを取り入れるということが時代思潮を反映しているという点を見逃さないための観点である。